

くるみのぼうけん

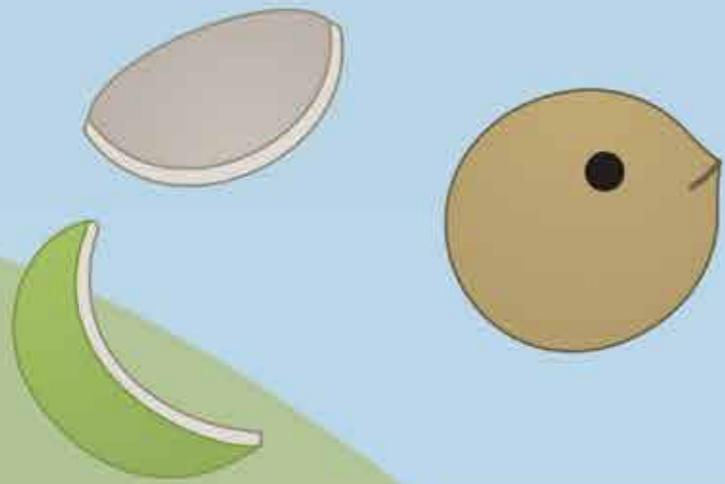


その大きな街にはいくつかの川が流れていて、
川のもとには街を見下ろすたくさんの山やまがあります。
その中でもまちに近い小さな山にトンネルが一つありました。



トンネルの向こうは、木におおわれた山の中。
そこに一本のクルミの木がありました。
今年もたくさんの実がふくらみ、
実を包む緑の皮がもうはじけそうです。





しゅっぱつ
「さあ出発だ！」

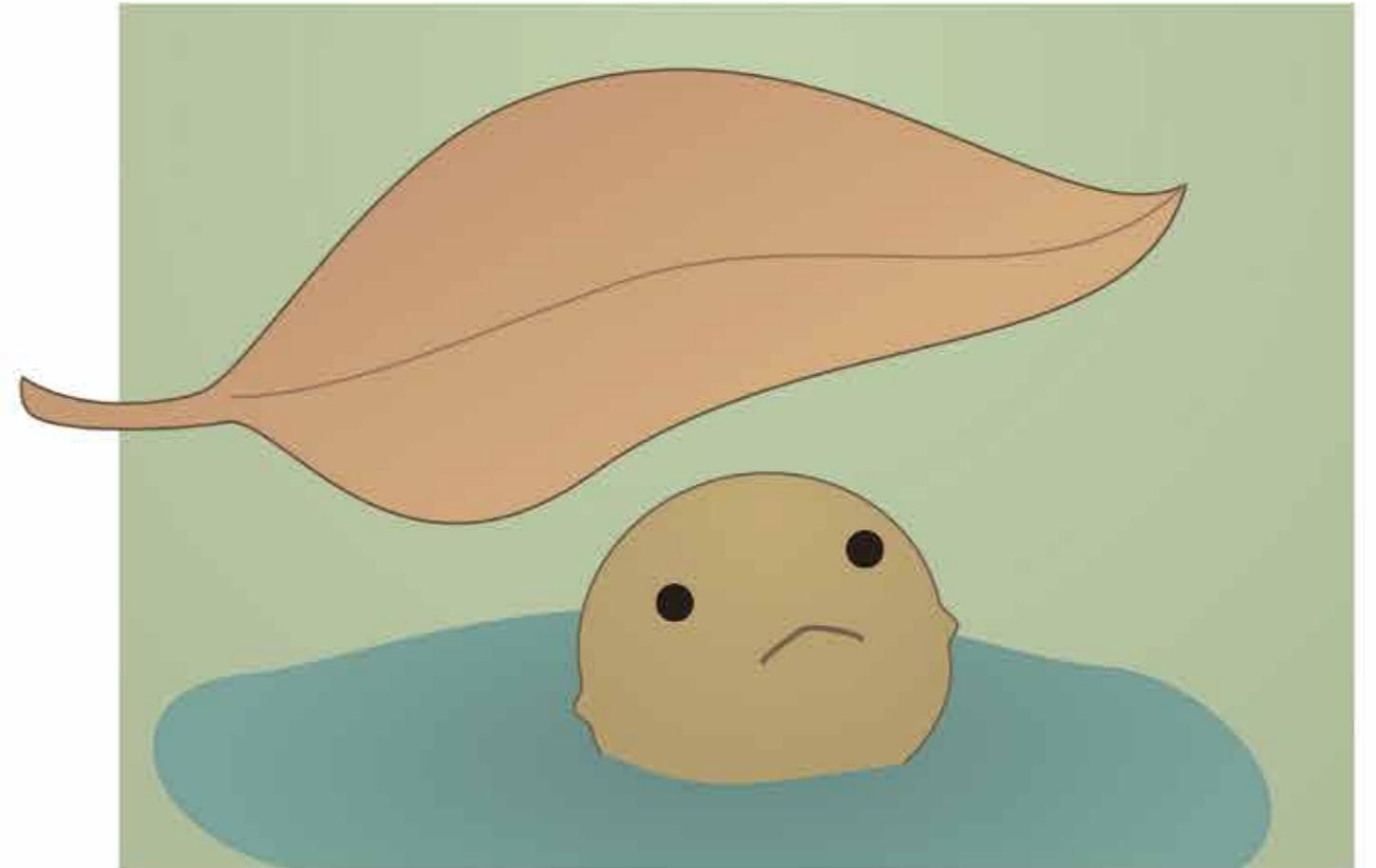
さいしょ と だ
最初に飛び出したのは、
ひと おお そだ
一つだけ大きくリンゴほどに育ったクルミでした。

やま しゃめん げんき ころ
コロコロコロコロ、山の斜面を元気よく転がりました。

ざんねん たに みず
でも残念、谷の水たまりにポチャッとはまってしまいました。

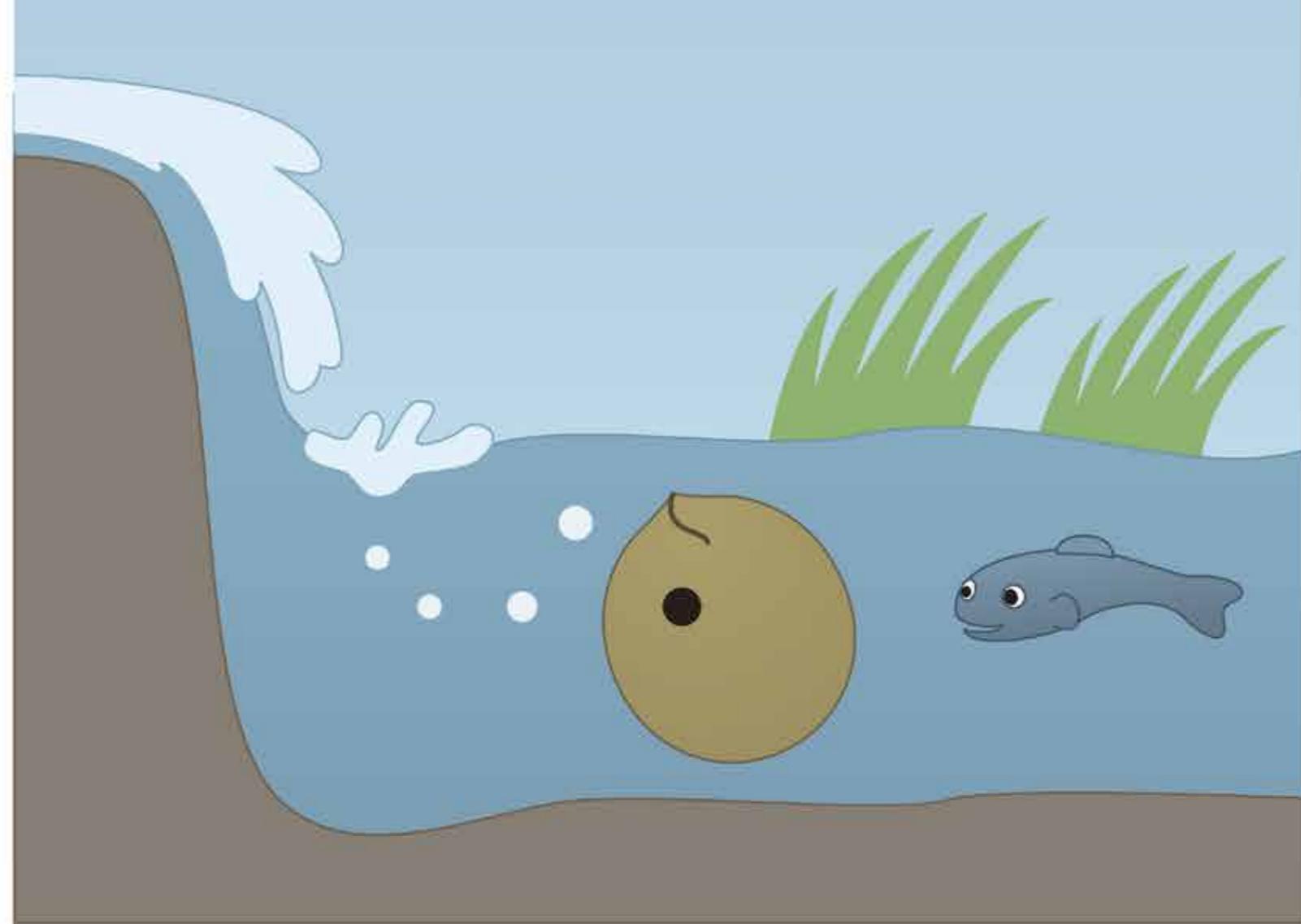
「ああ、こんな所でのんびりしていたらカラスにつかまっちゃうよ。」
クルミは不安そうに言いました。
カラスはクルミの実を見つけると、
くるま はし どうろ み お わ た
車の走る道路に実を置いてからを割って食べるのです。

と お ぼ
飛んできた落ち葉がクルミをかくしてくれました。





つぎ ひ あめ みず おがわ
次の日は雨でした。水たまりがあふれて小川になりました。
プカプカと浮かんだクルミはおおよろ なが もり ぬ のはら で
流れは森を抜けて野原に出ました。



そら ひろ
「空が広いなあ！」
ときどき さかな つつ たき め まわ たの たび
時々魚に突かれたり 滝つぼで目を回したりしましたが、楽しい旅でした。

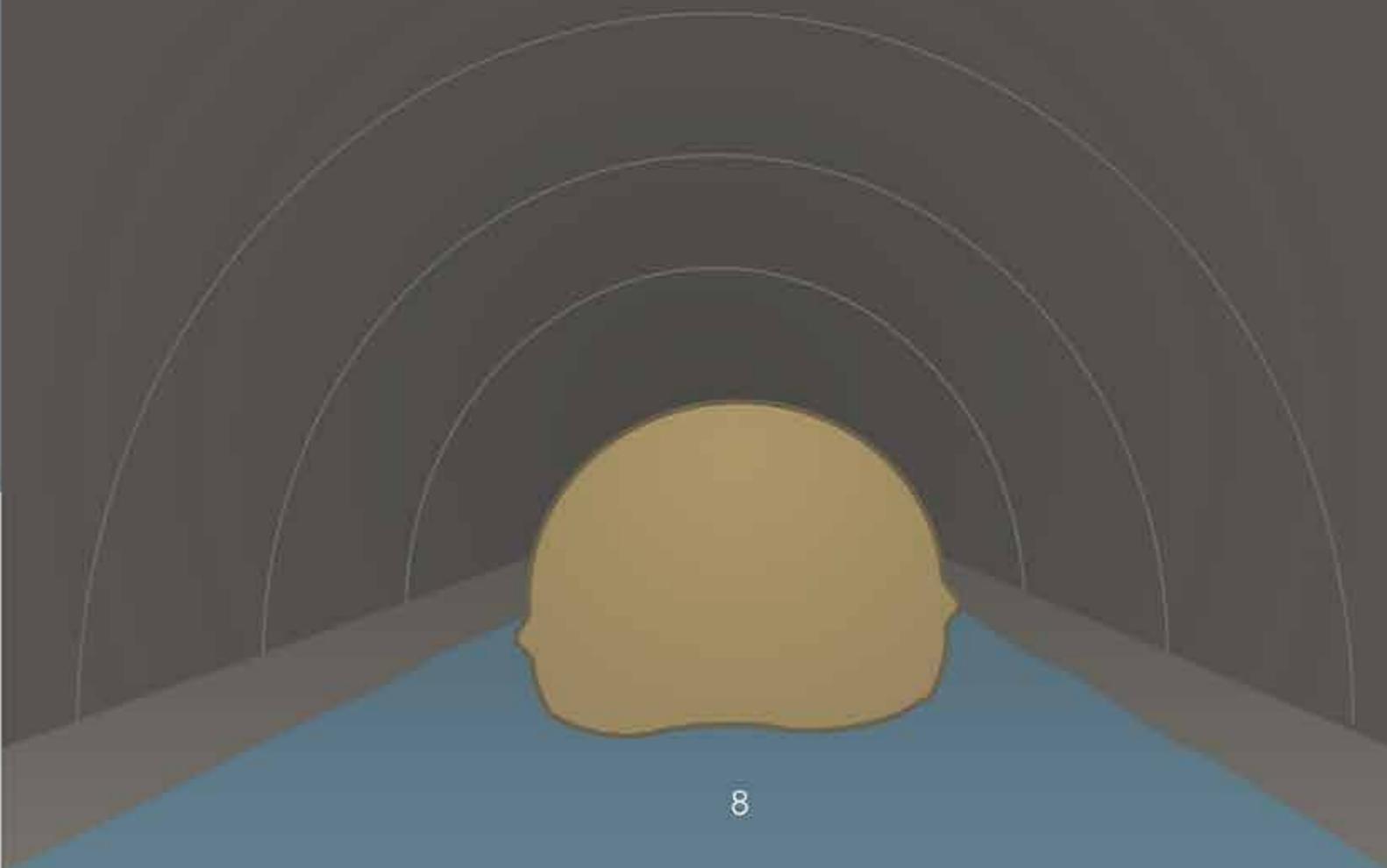


なのかめ
七日目のことです。「あれ？」
いま ふうけい ちが
今までとずいぶん風景が違う」
みどり み
まわりに緑が見えず、
かわ はいいろ たか あいだ
川は 灰色の高いかべの間を
すす
ただまっすぐに 進んでいました。

とき
その時です。するどいつめとくちばしの くる かげ
黒い影がクルミに せま き
迫って来ました。
カラスです！ でもクルミは 逃げる ことができません。
「ワアやめてくれえ！」

しゅんかん め まえ ま くら
つぎの瞬間、目の前が真っ暗になりました。
かわ せま すいろ はい
川が 狭いトンネルのような 水路に入ったのです。
す
カラスには つかまらずに 済みました。
すいろ なか しず なが
クルミは ひんやりした水路の中を 静かに流れました。

すこ はな ごえ き き
少しして 話し声が聞こえて来ました。



ネズミの親子のようです。「ほら、うまくこっちに引っ張るんだ。」

長い枝でクルミが川のふちに引き寄せられました。

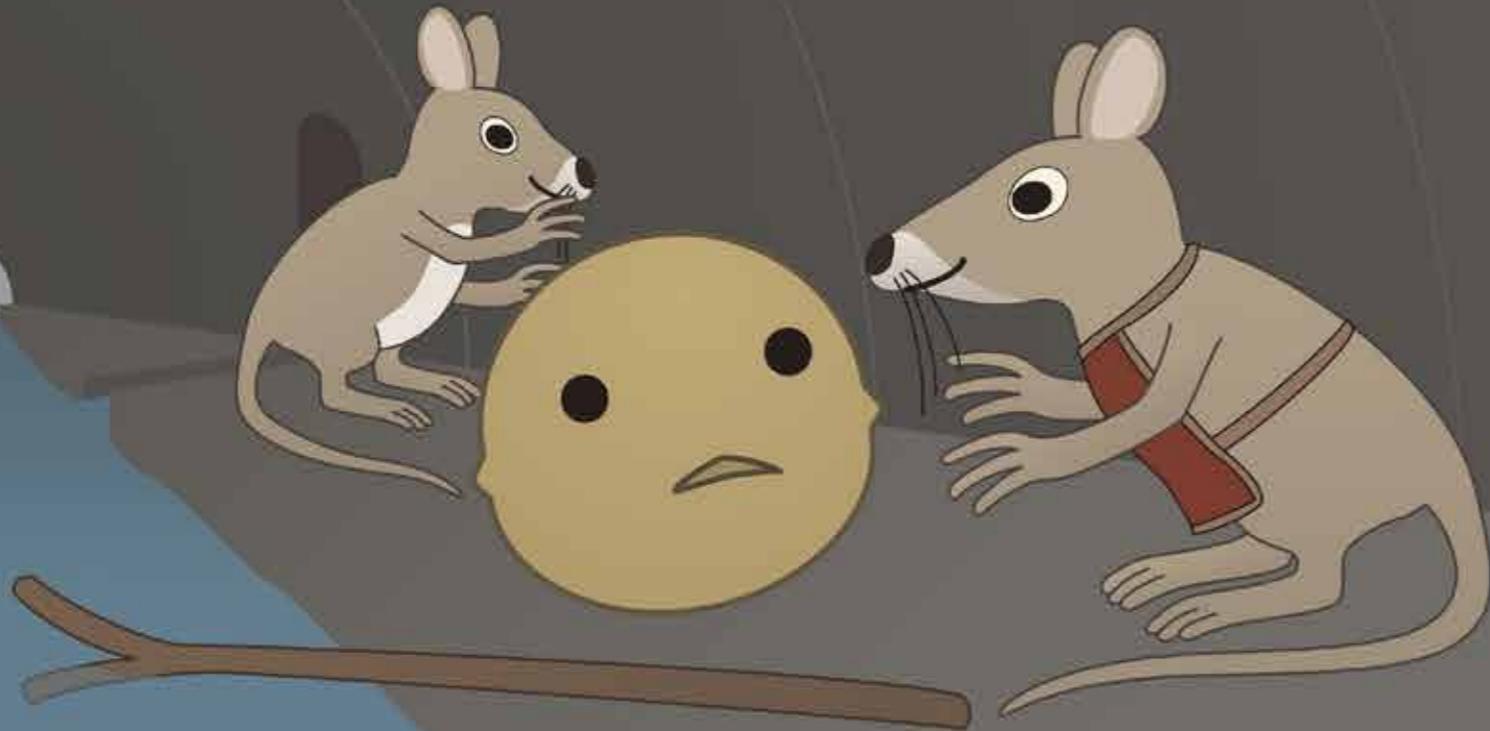
「こりゃクルミかね。ずいぶん大きなこと。」

クルミは地面に置かれました。

「すごいごちそうだね。みんなを呼んで来る。」

ネズミの子が言うと、やがてガヤガヤと仲間が集まってきました。

クルミはあわてて言いました。「待ってくれ、僕を食べないでくれ！」



「僕はもっと旅をして世界を知りたいんだ。」

「おやおや、話をするクルミだよ。これを食べたらみんなおしゃべりになっちゃうね。」

「ハハハハハ。」ネズミたちは笑いました。

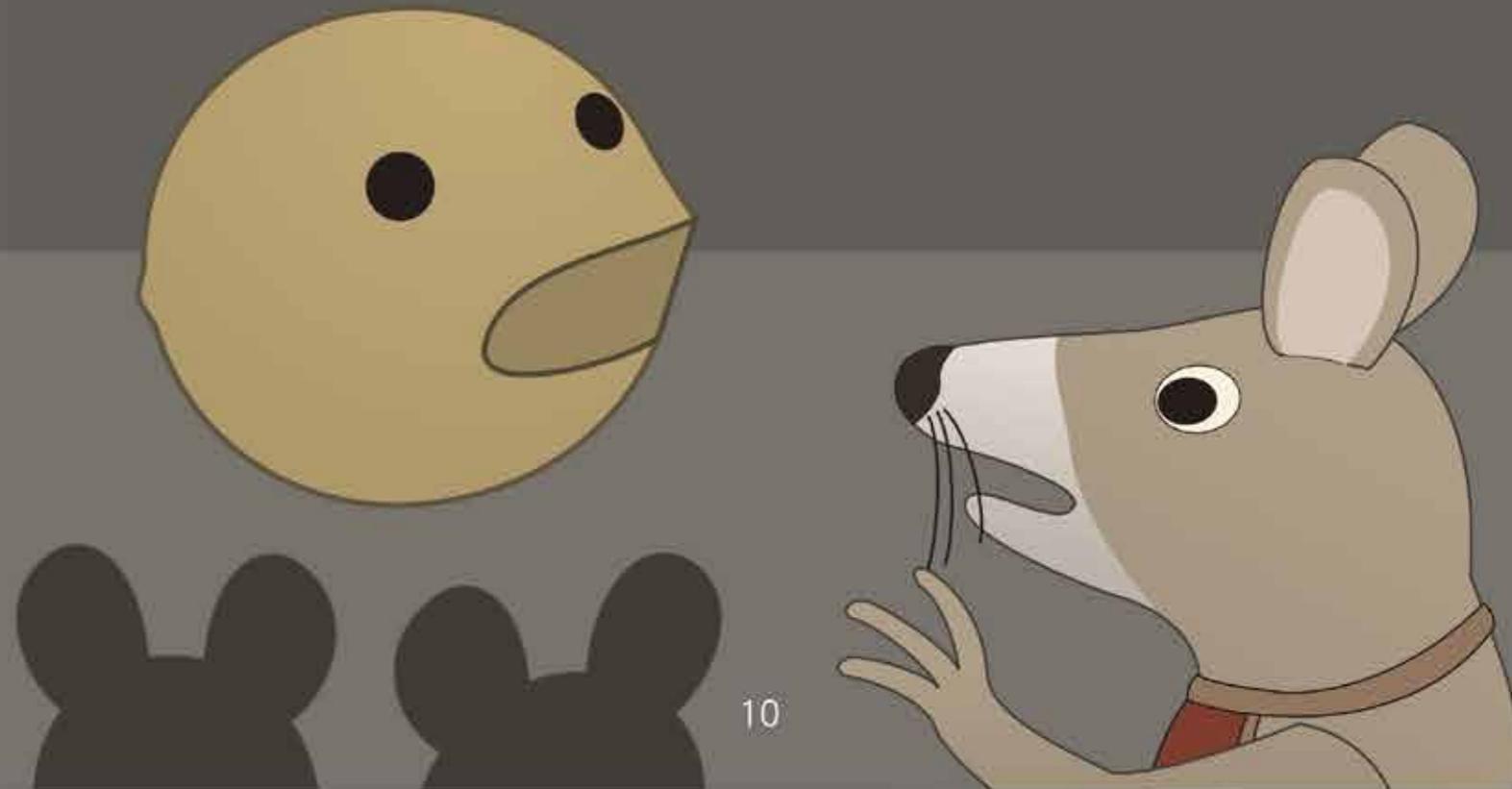
「僕のたのみを聞いてくれないのか!？」

けんめいにたのむクルミの声を聞いて、母ネズミが答えました。

「みんな生きていくのに必死なのさ。私たちだっていつどうなるかわからない。

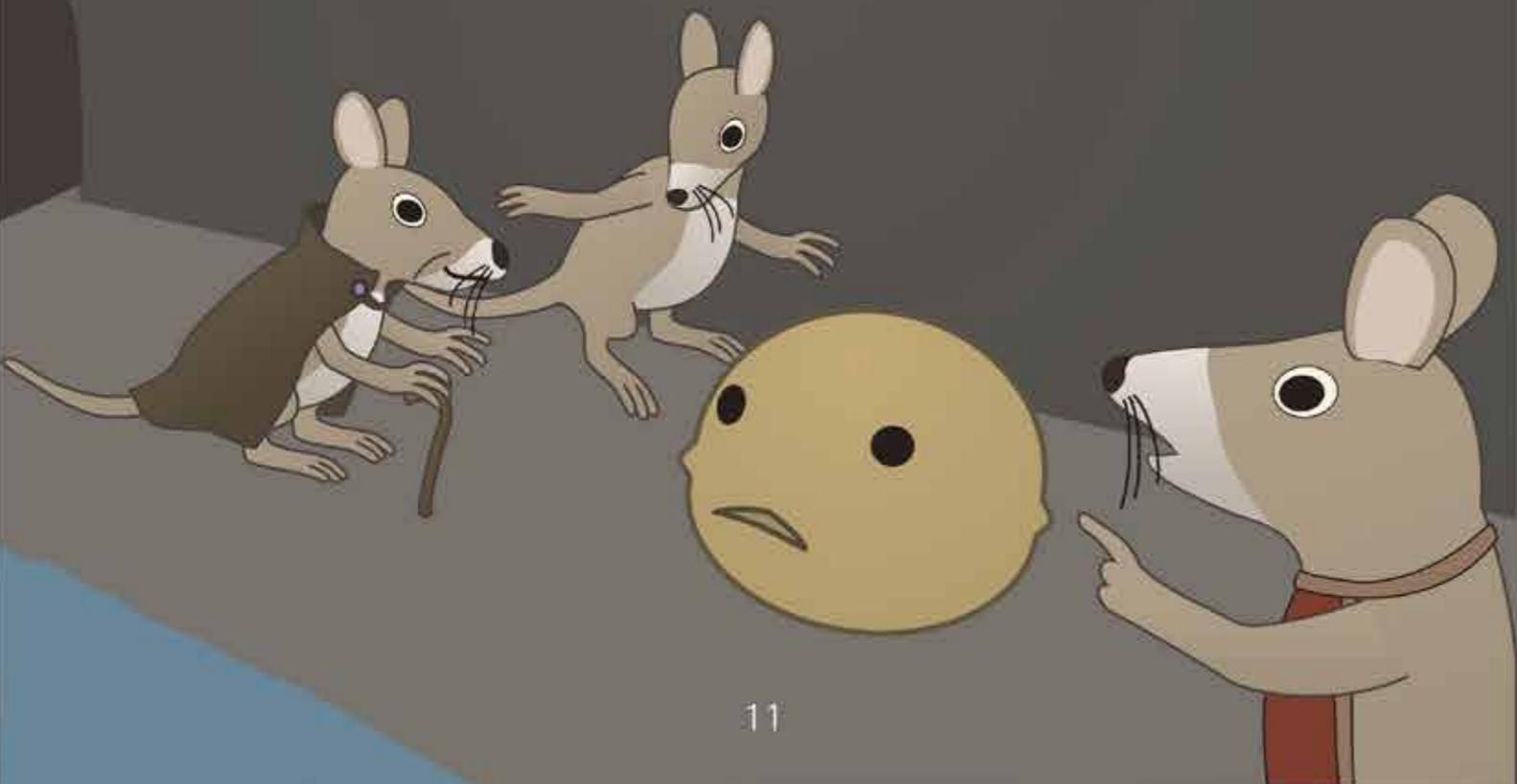
今お前さんを見逃すってことは、このみんなの命にも関わることなんだよ。」

クルミは考えました。



「わかったよ。じゃあ僕の気楽な旅は あきらめる。
でもここまで来たんだ。ただ食べられて終わるより 自分で何かしたいんだ！
みんなのためになることをさ。」

はは 母ネズミが わか 若いネズミに なに い 何か言いつけました。
わか 若ネズミは、つえを突いた お婆さんネズミを連れてきました。



「わしは 魔女ネズミ。
昔、川を下って来て、ここに住み着いたのさ。
お前さんのように 大きなクルミの話も よく知っているよ」

そう言うと、魔女ネズミは



「さあ、かくごはいいかい？」
魔女ねずみが クルミに向かって つえをふり上げました。

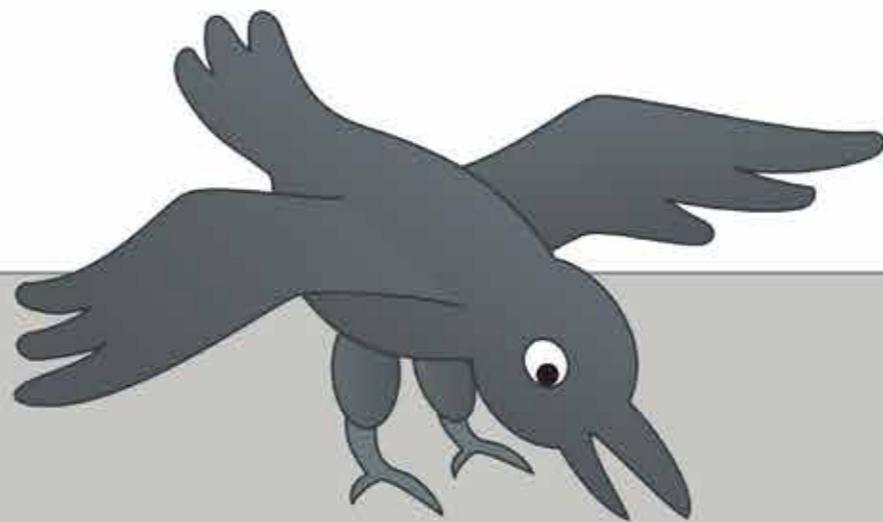
「そうら！これでどうだい？」

まじょ 魔女ネズミがつえをふると、クルミが二つにわれて 小さな男の子が出てきました。

「うわあ！ほく人間になれたの？」

「なりたきゃ何にでもしてやるさ。さあ、みんなのためになるという約束だ。

いっしゅうかん 一週間したら またここに来るように。話を聞かせてもらうよ」



ひとばんかんが考えたクルミぼうやは、
カメのようにクルミのからをせなか
すいろで 背中にしばりつけて、水路を出ました。
そして川岸でかわざし
からにかくれていると、
「カアカア」とこえがして、おもとおき
思った通りカラスが来ました。

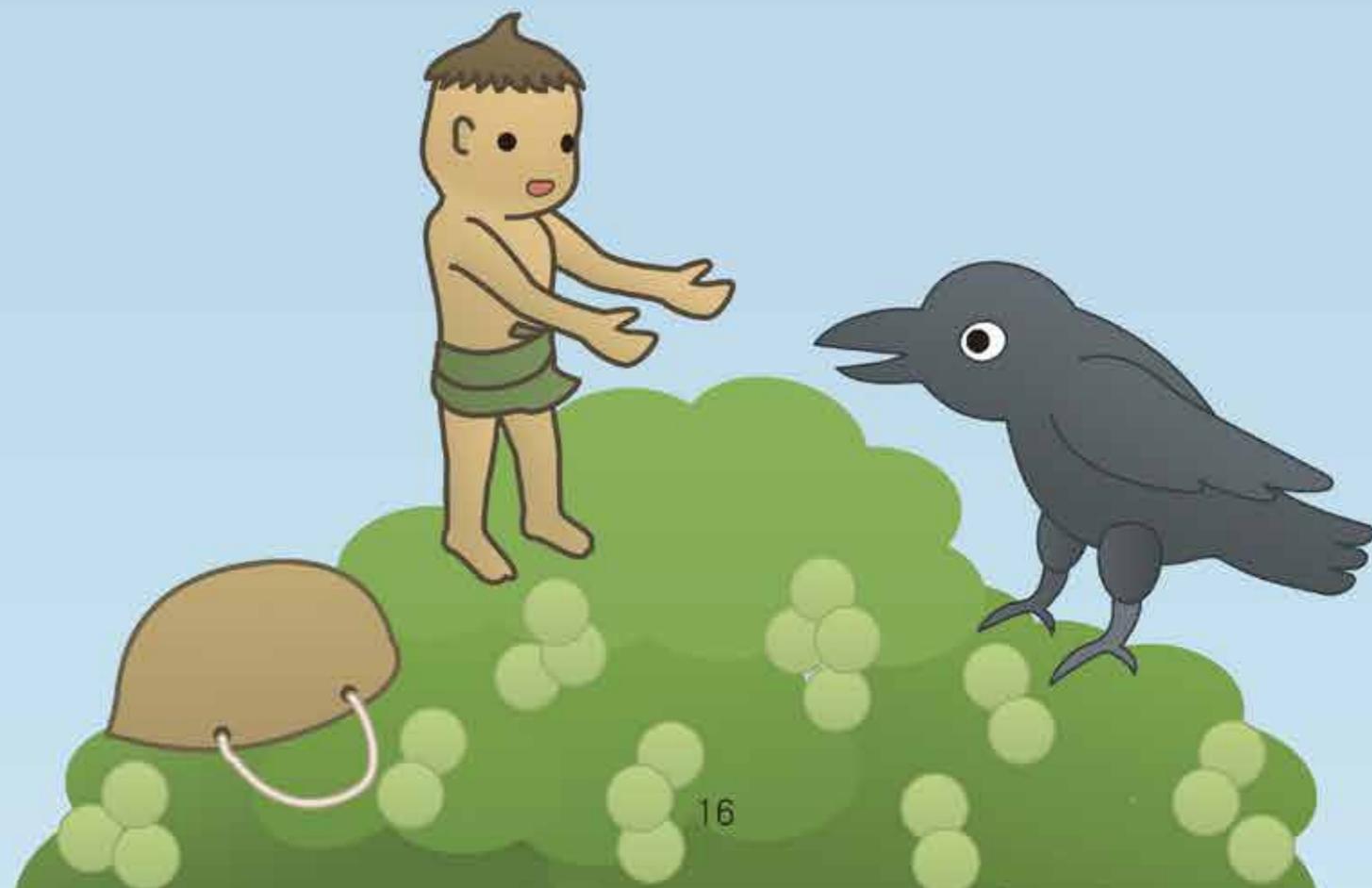


カラスがクルミのからに
つめをかけようとしたその時、
すばやくクルミ坊やは、
カラスの足をつかみました。

あわてたカラスは必死に飛び上がりました。「カア！何をやる。はなせ。」
でもクルミ坊やははなしません。そして言いました。
「クルミが欲しいなら僕が場所を教える。だからそこまで飛んで行ってくれ。」

山に着いたクルミ坊やは、カラスに言いました。
「みんながクルミを食べるのは仕方ない。生きるためだもの。
でも僕のためのみを聞いて欲しい。僕は旅をして思ったんだ。
この街にもっと木がたくさんあったらいいんじゃないかってね。

だからカラスさん。クルミを一つ食べたら もう一つを街のどこかに
埋めてくれ。川のそばにも埋めてくれ。
そしてこのことを、ほかのカラスにも伝えて欲しいんだ。」





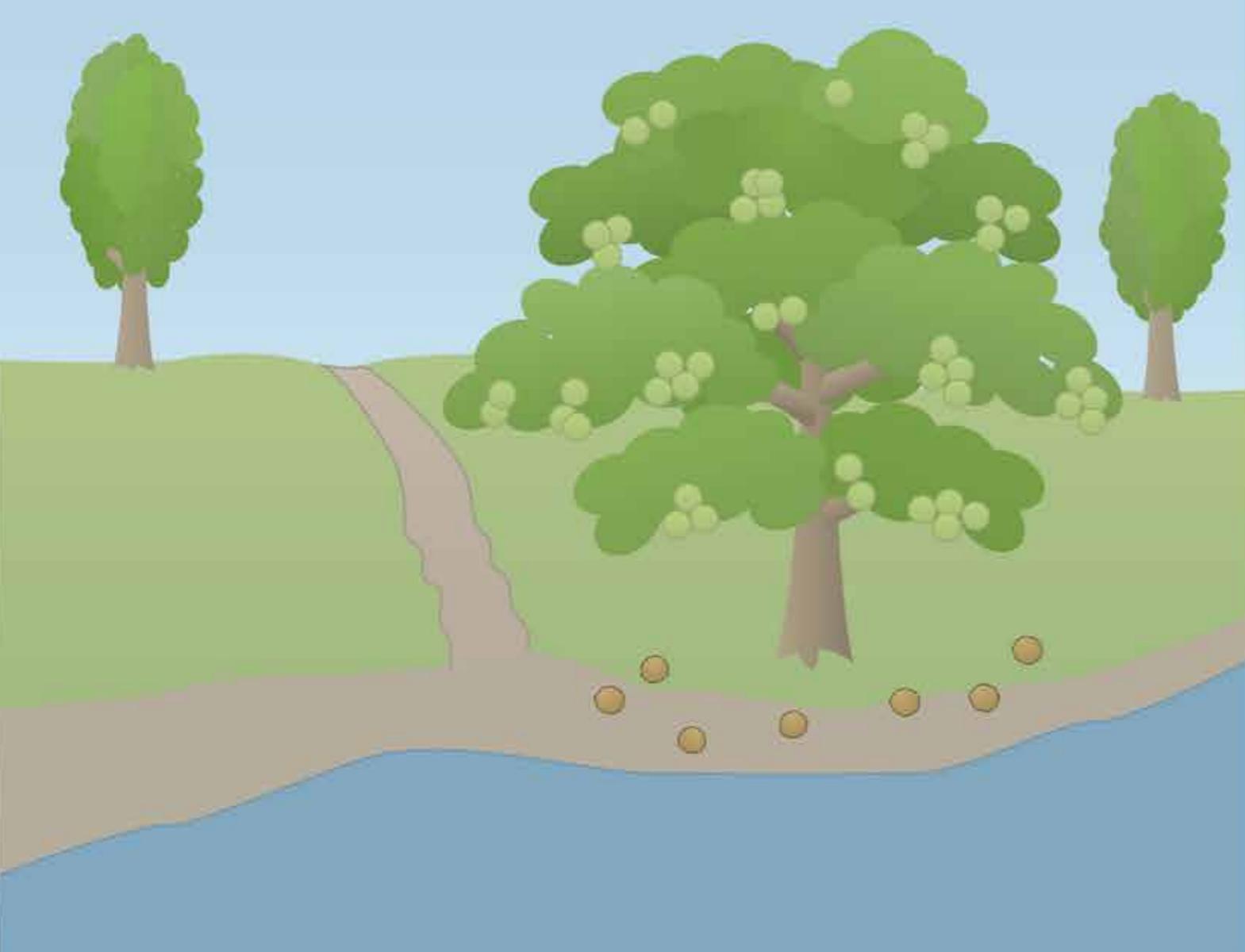
クルミ坊やはそう言うといわく、からに乗ってまた川を下りました。
一週間後、ネズミたちのいる水路に着きました。

クルミ坊やの話を聞いて、魔女ネズミは満足したようでした。
「そういえば、お婆さんが知ってる大きなクルミの話って?・・・」
「ハハハ 実はな、昔、わしもおまえさんのようにクルミだったんだよ。
ここに流れ着いた時に、やっぱり魔女がいた。
わしはネズミになって、魔女の弟子にもらったのさ。」

さて坊や、もう一度何かに変えて欲しくはないかい?
ネズミになって私たちといっしょにくらすのもいい。」



クルミ坊やの気持ちは決まっていた。
「クルミの実に変えてよ。そしてカラスに運んでもらってほしいんだ。」



それから なんじゅうねんた 何十年経ったでしょう。

かわ 川のそばにある こうえん 公園に おお 大きな き クルミの木が しげ 茂り、
あき 秋には み たくさんの実を こぼす ようになりました。

かわ お 川に落ちたクルミが、あのネズミたちのいた とど トンネルにも届きます。





かぜ ふ
風が吹いてきました。

き は おと
サフサフと聞こえる 葉の音は、

ぼう わら こえ
あのクルミ坊やの 笑い声かもしれません。



さっぽろ 絵本 グランプリ

「さっぽろ絵本グランプリ」は、平成 28 年 11 月 7 日に開館した「札幌市えほん図書館」の開館に合わせて、平成 28 年度から開催している創作絵本のコンクールです。このコンクールでは、札幌の自然や文化などの札幌の魅力を表現した子どものための絵本作品を募集しました。

「くるみのぼうけん」は、平成 28 年度に開催した「さっぽろ絵本グランプリ」の特別賞作品です。

くるみのぼうけん さく 清水 郁太郎

平成29年（2017年）4月

発行 札幌市えほん図書館

札幌市白石区南郷通1丁目南8-1 白石区複合庁舎6階

電話：011-866-4646 ファクス：011-866-4600

URL：<http://www.city.sapporo.jp/toshokan/ehon.index.html>

本書の著作権は、原作者に帰属し、全部又は一部を無断で複写、複製、転記することを禁じます。なお、札幌市が行う作品の複製・配布に係る権利、展示会・ホームページ等での公開に係る権利及び加筆修正に係る権利（複製権、上映権、公衆送信権、伝達権、口述権、展示権、譲渡権、貸与権、同一性保持権）は札幌市に帰属します。